研究通信

2026.10.27

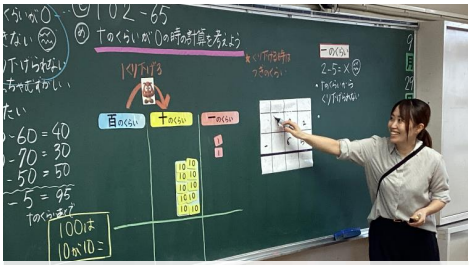
Ｎｏ．３

発行者　河田直哉

わからん！わかった！！面白い！！！

～学びを生かす３Ｃの授業の創造～

2年生　研究授業・研究会



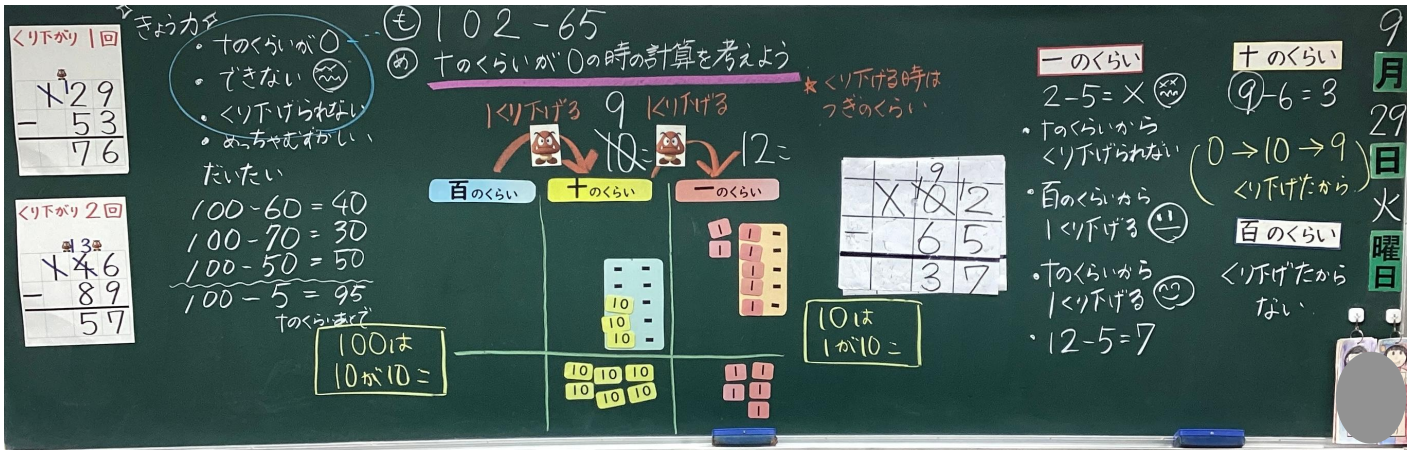
▽**日　時**　令和８年9月29日（火）　▽**授業者**　堀　綾香

▽**学　年**　第2学年1組

▽**単元名**　【ひっ算のしかたを考えよう】

▽**単元で生かす中核的な内容**

「数の仕組み（十進位取り記数法）を活用すれば、
大きな数の加法減法の筆算も、１位数などの基本的な計算を基にしてできる。」



授業者・学年より



授業者

筆算の学習は、ただ筆算ができるだけではなく、"数や位の関係がわかってこそ"だと思っている。位取り表、言葉、図など、色々な方法で取り組めるよう学習を進めてきた。また、ノートだけでなく、タブレットを用いても考えられるよう指導してきた。

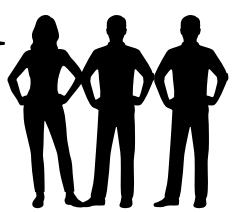
１年生から活用してきた"ブロック"はこの単元から卒業し、"位取り表"を活用するようにした。

全体共有では、色んな子が続きを言えるように指導してきた。

まとめとふりかえりについては、1学期はみんなで同じことを書いていたが、2学期からは自分で書いて表現できるように指導している。

事前授業では、ほとんどの子どもが"タブレット"を活用している姿があった。そこで、「色んな方法を選択できる方がいいよね。」と考え、それぞれの子どもにあった筆算の中身の方法が選べる形をとるようにした。

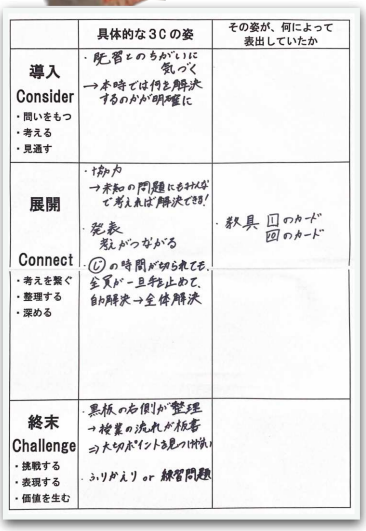
テンポよく、同じ方向を見て授業を受ける子どもたちがいた。そんな子どもたちを観て、"3C"の具体的な姿にはどのようなものがあったかを話し合いたい。



学　年

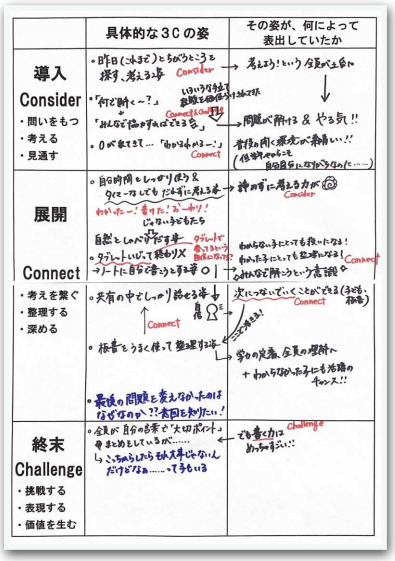
各学年より





	具体的な3Cの姿	その姿が、何によって表出していたか
導入 Consider ・問いをもつ ・考える ・見通す	・既習とのちがいに気づく →本時では何を解決するのかが明確に	
展開 Connect ・考えを繋ぐ ・整理する ・深める	・協力 →未知の問題にもみんなで考えれば解決できる! ・発表 →考えがつながる ・⑪の時間が切られても、全員が一旦手を止めて、自力解決→全体解決	・教具 □のカード ○のカード
終末 Challenge ・挑戦する ・表現する ・価値を生む	・黒板の右側が整理 →授業の流れが板書 ⇒大切なポイントを見つけやすい ・ふりかえり or 練習問題	

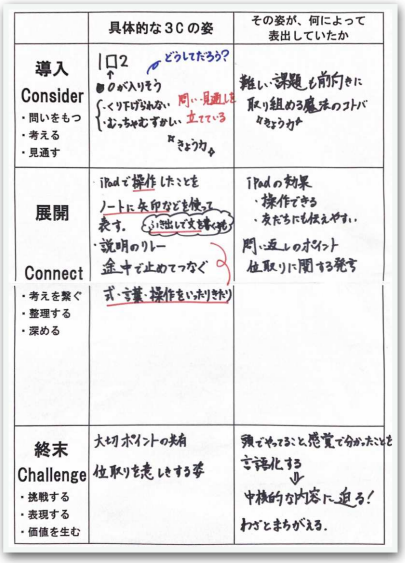
●既習との違いに気づく所から始まり、「今日の問題は何を解決すればよいか。」が明確になっていた。これが、子どもたちの自力解決の時間に繋がっていた。
●見通しを深くせずとも子どもたちが自力解決に取り組めていたのは、こらまでの学びが出ていたのだと感じた。
●展開では、「協力」というワードが出ていた。未知の問題を解決しようとする姿が、共有やリレー発表に実際に表れていた。
●教具としての数字カードがとてもわかりやすく、操作性にも優れていた。これが子どもたちの思考を支えていた。
●板書（右）に書かれていたことが、子どもたちの大切ポイントを見つける支えになっていた。
●大切ポイントとふりかえりの内容が重複している子もいた。練習問題の時間に変えてもよかったのでは？という話も出ていた。



	具体的な3Cの姿	その姿が、何によって表出していたか
導入 Consider ・問いをもつ ・考える ・見通す	・昨日（ふまで）とちがうところを探す、考える事 Consider ・「何だ解く～?」 ・「おなじ様にすればできる。」 ・○が取れて… 「あれれ?」 Connect	→考えよう!という全員が主体 →問題が解ける & やる気!! →前の問に戻ってみたい!!
展開 Connect ・考えを繋ぐ ・整理する ・深める	・自分時間をしっかり使う & Qマークでも だれかに考える事 ・タブレットいじって遊びリメ →ノートに自分の考えを書く ○ ・共有の中でしっかり話せる事 ・板書をうまく使って整理する事 ・最後の問題を変えなかったのはなぜなのか?? 意図を知りたい!	→神の声に考える力が Consider Connect Connect Connect Connect Challenge

●「協力すればできる」という声から、学級の繋がりが見えた。発達段階として、低学年は自分のことだけを考えてしまう所があるが、互いの気づきや考えに共感する姿が見られた。
●展開の自力解決の時間では、タイマーを使っていなかった。子どもたちは終わりが分からないのにも関わらず、もくもくと取り組めていた。書けたから終わりではなく、そこから更に自然発生的に話し合いが始まっていた。タブレットの操作においても、そこから理解したことをノートにまとめていた。
丁寧に学ぶ姿が見られた。
●板書が支えとなり、苦手に感じる子も活動に取り組めていた。



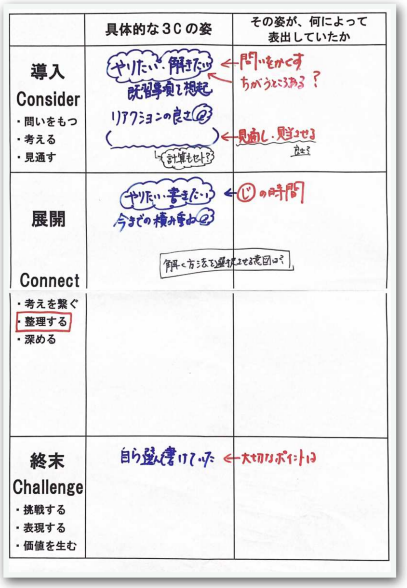


	具体的な3Cの姿	その姿が、何によって表出していたか
導入 Consider ・問いをもつ ・考える ・見通す	1口2 どうしたろう? ○が入りそう くり下がらない むっちゃむずかしい 立てている きょうか	難しい課題も前向きに取り組める魔法のコトバ なおうか
展開 Connect ・考えを繋ぐ ・整理する ・深める	iPadで操作したことをノートに矢印などを使って表す。 説明のリレー 途中で止めてつなぐ 式・言葉・操作をいかりやすい	iPadの効果 ・操作できる ・友だちに伝えやすい 問い返しのポイント 位取りに関する発言
終末 Challenge ・挑戦する ・表現する ・価値を生む	大切ポイントの共有 位取りを表しやすい	頭でやっていることを感覚で分かったことを言語化する 中核的な内容に迫る! わざとまちがえる.

●「協力」という言葉が心に残った。難しい問題・新しい課題に前向きに取り組めることが、学級の雰囲気として感じられた。
●"中核的な内容"に迫るために取り組まれていることが感じられた。
「十進法」への理解や思考が、この１時間の中でも子どもたちの言葉から表れていた。
タブレットでの操作や言葉、図などでの表現がそれを更に深めていたと感じた。
●「位取り」に関することに"問いかえし"をすることによって、教材研究で明らかにしたことに迫られていた。

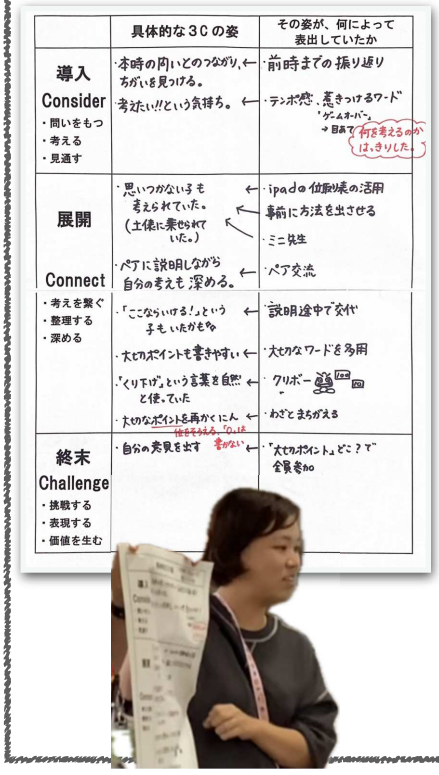


各学年より



●先生の子どもたちに対する「すごいね～」「よく考えてるね」という優しい声かけが飛び交う教室が素敵だった。
●子どもたちが既習事項を想起し、「やってみたい」「解いてみたい」という姿が表れていた。
●子どもたちの互いのリアクションがとても良かった。
●自力解決の時間でも、「やりたい」「書きたい」が表れていて、今までの授業の積み重ねからきていると感じた。
●解く方法を限定せず、子どもたちに選ばせている意図があればお聴きしたい。
●"大切ポイント"を自分で書き、ふりかえりまでできていたのが素敵でした。





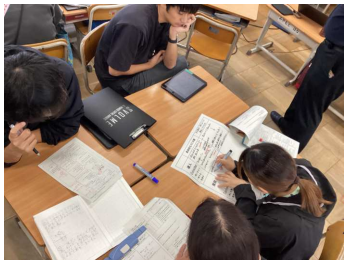
●前時までのふりかえりで、本時での問いとの繋がりや違いを見つけることができていた。
●「102－65」というシンプルな問題提示であったにも関わらず、授業全体のテンポ感や飛び交うキーワードが良く、子どもたちが惹きつけられていた。
●位取り表や他の方法を想起させたり、子どもどうしが関わり合う時間を設けたりすることで、どの子も考え出せる土台に上がっていたと感じた。
●色んな子が順番に発表することで、「ここまでなら伝えられる」というChallengeを後押ししていた。全員参加の手立てとして有効であると感じた。
●先生が大切なキーワードを理解され、板書していたからこそ、子どもたちも大切ポイントがわかっていた。













樋口万太郎先生　より

▼1時間（45分）における3Cについて

3Cは順番に立ち上がってくるものなのか？
関わり合っているものなのか？



3Cはどの場面においても関わり合っている。今日の授業や協議会を観ていると、「導入部分では"Consider"」と限定して考えるよりも、"Challenge""Connect""Consider"のそれぞれが関わり合っている。それぞれが表れる。として観る方が良いと感じた。

導入	**Consider** ・問いを持つ ・考える ・見通す
展開	**Connect** ・考えをつなぐ ・整理する ・深める
終末	**Challenge** ・挑戦する ・表現する ・価値を生む

【New参観シート】

	Challenge	Connect	Consider
導入			
展開			
終末			

【New討議会シート】

導入	
展開	
終末	

今回の研究授業・討議会を受けて、努力目標委員会で**"参観シート"**と**"討議会シート"**について再検討を行いました。

"参観シート"は、導入、展開、終末のそれぞれに3Cの姿が書き込めるようにしています。子どもたちの姿をそれぞれに書き込みながら授業の参観をお願いします。

"討議会シート"は、あえて3Cの枠を取っ払っています。討議会の際には、参観シートをもとに、子どもたちの3Cの姿が**何によって表出していたか**について討議し、シートに書き込むようにしてください。

※詳しくは努目の先生方へ

▼現状維持はやめよう

授業での子どもたちの"自己表現"や"表情・目線"、半年でここまで育っている子どもたちが素晴らしかった。そんな子どもたちの【半年後の姿】は、どのようにイメージされていますか？

3Cの経験を積んだ先の子どもの姿とは？（2年生が終わるときには）

1学期　2学期

3Cの姿が表れてきた子どもたち

これまでの指導

3学期　次の学年

3Cの経験を積んだ先の子どもたち

これからの指導

これまでの子どもたちは、しっかり力がついてきている。これからは**その力を"どう使っていくか"という指導に変わっていく。**

今までは先生が出ていた所を、「同じようにやってごらん。」というように、失敗してもいいから子どもたちにやらせてみる。

子どもたちを惹きつける工夫から、子どもたち自身に取り組ませていく工夫へ。

▼授業者・学年の話を受けて

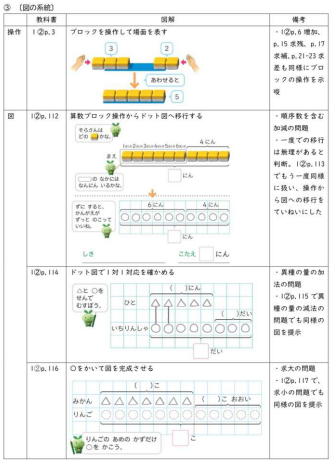
"算数ブロック"について





ブロックの卒業は良いと思う。
テープ図や線分図へと発展していき、"比例"の概念へと繋がっていく。"いくつ分"という考え方から、"何倍"の考え方となる。

【線分図・数直線の指導の系統】

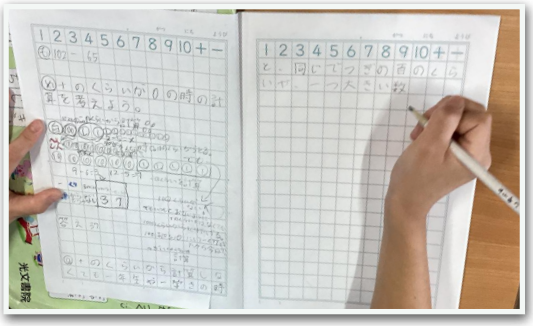


	教科書	図解	備考
操作	1 ②p. 3	ブロックを操作して場面を表す	・1②p. 6 増加, p. 15 求残, p. 17 求補, p. 21-23 求差も同様にブロックの操作を示唆
図	1 ②p. 112	算数ブロック操作からドット図へ移行する	・順序数を含む加減の問題 ・一度での移行は無理があると判断, 1②p. 113 でもう一度同様に扱い, 操作から図への移行をていねいにした
	1 ②p. 114	ドット図で 1 対 1 対応を確かめる	・異種の量の加法の問題 ・1②p. 115 で異種の量の減法の問題でも同様の図を提示
	1 ②p. 116	○をかいて図を完成させる	・求大の問題 ・1②p. 117 で, 求小の問題でも同様の図を提示

東京書籍が、線分図・数直線の指導の系統について公開しています。是非参考にしてみてください。

"大切ポイント"について





２年生のこの時期であるにも関わらず、子どもたちは本当によく書けていた。もっと時間があれば、もっと書いていたでしょう。筆算の手続きを自分なりの言葉でしっかりと表現できる子どもたちに育ってきている。
だからこそ、"大切ポイント"や"ふりかえり"では、

「今までと同じだ。」
と表現されていて欲しい。

これが書ける子というのは、学びをConnectできているということ。筆算をただの手続きで終わらせず、その意味や価値を感じられている。

学びが統合されている、深い学びの実現。

"動機づけ"について



子どもたちの"動機"が非常に高かった。
"動機づけ"は、"内発的"か"外発的"かで二分できるものではなく、
グラデーションになっている。
そして、内発的動機づけは非常に難しい。

"内発的動機づけ"に近づいている、
自律的な子どもたちだった。
だからこそ、
問題を工夫する必要はなかった。



▼授業者・学年の話を受けて

"見通し"について



"見通し"には**3つ**の段階がある。



第１段階　～結果の見通し～

（だいたい〇〇くらいになりそう！）

第２段階　～手順の見通し～

（何がわかればできるかな？）

（既習の中に手がかりはないかな？）

"見通し"の時間が一番思考している時間！

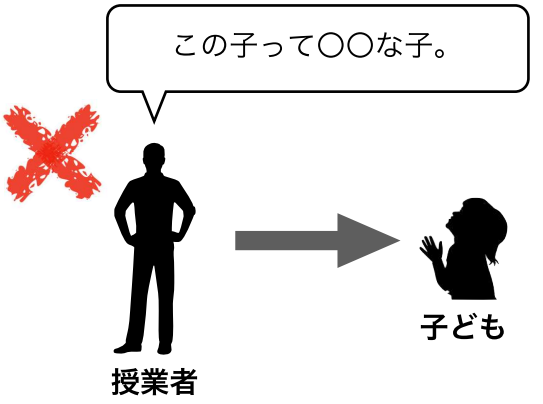
第３段階　～方法の見通し～

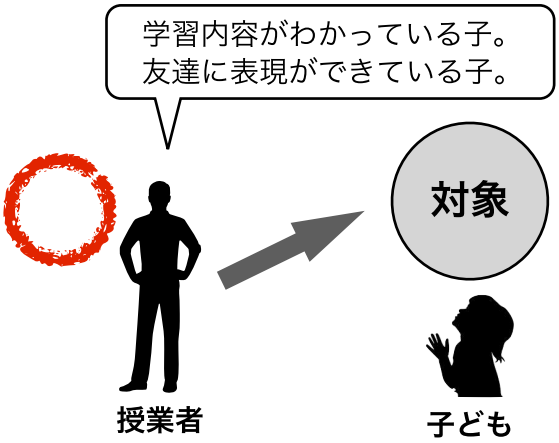
（何でどうやって解決していこうかな？）

〇〇を生かしてやってみよう!!

自　力　解　決

3Cを実現できない子はいない。





子どもたちが「3Cを実現できるか」は、子どもたちの性質ではなく、教師自身の「対象（相手、学習内容など）」への理解と、子どもたちと「対象（相手、学習内容など）」との関係で決まる。

「この子ってこんな子だよね」という話ではない。

「学習内容」「表現」を対象とした場合、今日の子どもたちは3Cを実現する姿があった。だからこそ私たちもその子どもたちの姿を基に討議することができた。

授業者も参観者も、あらかじめこの単元の「対象（学習内容など）」を理解しておくと、子どもたちに対する見方や指導の仕方が変わってくる。

教師が「対象」を知り、
子どもと対象の間で何が起きているかを見る。
これが子どもの事実をみるということ。

討議会において、「子どもの姿から話をしよう。」とよく言われるが、それは**「対象」と「子ども」の関係がどうであったか**という事。

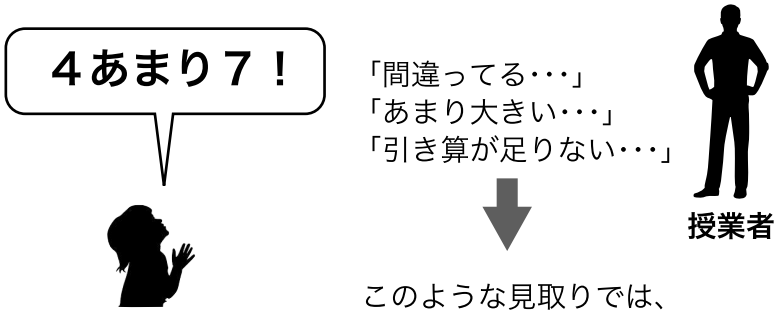
でなければ、教師の指導技術ばかりを話してしまう。。。

今年度から毎回の教材研究会で「単元の中核」を職員全員で明らかにしていることが、まさに樋口先生の仰る「対象」を知る。という事だと思います。今後もしっかりと継続していきましょう!!

「対象」と「子ども」の関係をみるために



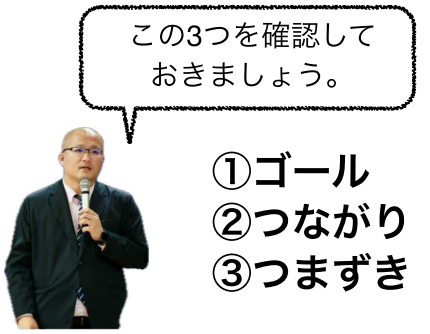
「２３÷4」を「５あまり３」ではなく、
「４あまり７」と答えた子どもがいた時、
どのようにその姿を見取りますか？



このような見取りでは、
まだ「関係」で見れていない。

「関係」で見るために･･･

授業前の3つの確認



①ゴール　【この時間で、なにがわかれば・できればよいのか】
②つながり【前に何を学んでいて、今日は何が新しいのか】
③つまずき【どこでつまずきそうか】

たとえば『あまりのあるわり算』だったら･･･

① ゴール【この時間で、なにがわかれば・できればよいのか】

- あまりはわる数より小さなることを理解し、「あまりを出す」わり算ができる。

② つながり【前に何を学んでいて、今日は何が新しいのか】

- 既習･･･「わり切れるわり算」
- 未知･･･「わり切れないときの処理」

③ つまずき【どこでつまずきそうか】

- 九九で「近いけれど小さい数」を選べない。
- あまりがわる数より大きくなっても気づかない。
- 図と式が結びつかない。



- 「4個ずつ分ける」操作はできてる。
- 7個のばらの中に、まだ4個のまとまりが1つ作れることにきづいてない。つまり、「あまりはわる数より小さい」がまだ理解できていない。
- 4×4＝16までは九九で探せてる。
- 4×5＝20を選べなかったのは、九九の問題ではなく、「一番大きい」を選ぶ基準が曖昧だから。
- 図は描けてるので、次の一手は図の7個を指差して「まだ分られる？」と問うだけでよいのでは？



と、見とれるようになる。

TM担当者　より

今回の２年生の提案は**「数の仕組み（十進位取り記数法）を活用すれば、大きな数の加法減法の筆算も、１位数などの基本的な計算を基にしてできる。」**という中核的な内容と、**「位取り表（デジタル含む）」「自力解決」「まとめ・ふりかえり」**という指導の方法でした。

中核的な内容からは、十進法（10のまとまり）に帰着して考えることによって様々な問題を解決していく単元設計を感じることができました。これにより、子どもたちは常にこの知識を生かして思考を働かせていく様子がありました。また、そこに指導の方法として「自力解決」や「位取り表（デジタル含む）」に取り組まれておられたので、内容・方法共に深く学んでいたと感じることができました。

今回の堀先生の授業では、子どもたちの「自分の考えを表現する姿」や、それを「表現し合う姿」がたくさん見られました。研究授業前の一朝一夕で鍛えて表れる姿ではなく、4月からの学びの積み重ねであると感じました。本時を通して、「ひっさんのしかたを考えよう」の単元とともに、「子どもたちの学びの姿」を提案していただけたとい思います。

単元の序盤、2–1のAさんが、「百の位から1繰り下げるってどういうこと？」と繰り下がりの意味理解に苦しんでいた場面がありました。どうやって乗り越えるのだろう？とワクワクしてみていると、ふと手を挙げ、「百の位から繰り下げるって、どういうこと？よくわからない。」と、学級全体に疑問を投げかけたのです。

他のみんなはそこに疑問を持つ(気づく)ことはありませんでした、しかし唯一そこに引っ掛かり、自分の問いを全体に広げていく姿がありました。すると、「だって、百は十が10個でしょ？だから･･･」というように、位取り表を用いて説明する子が現れ、Aさんの理解へと繋がっていきました。仲間と学習内容の両方とConnectするシーンでした。



そんなAさんは、今回の授業で、「あ、前と同じように！」とつぶやき、取り組んでいました。お、なんて素敵な姿だ！と思い、まじまじと見ていると、今回のポイントである【十の位が空位のときの繰り下がり】の壁にぶつかっていました。これまたどうやって乗り越えるのだろう？とワクワクしてみていました。どうやら、百の位の１を十の位へは繰り下げれたのですが、その後の一の位へ繰り下げることへは違和感を感じていたようです。すると、近くの子たちにその壁を共有し、これまた位取り表の操作と仲間の説明を受けて解決してしまったのです。



その後は全体の場で【十の位が空位のときの繰り下がり】を説明することができていました。

学級づくり、教材内容の研究、指導方法の研究があって初めて、わからないことを「わからない」と言える、子どもがChallengeできる場を設定することができるのだと、改めて感じることができた授業でした。

また一つ、研究テーマ**《わからん!わかった!!面白い!!!～3Cを生かす授業の創造～》**を明らかにできたと感じます。

討議会では、「共有の時間に、子どもたちが互いに解決に向けて進んでいく姿があった。どのような取り組みからですか？」という質問に対し、「子どもたちが頑張っていた。子どもたちの力だと思います。」というように堀先生が返されたやりとりがありました。

「子どもの力」の背景には、子どもたちの能力と、それを引き出す我々教師の能力が必要です。もちろん、今日の子どもたちも頑張っていました。しかし、この１時間で子どもたちが"勝手に"解決に向けて進んでいくことができたのは、それまでの学級経営、教材への理解、指導の実践、が土台となった**"Challengeの場"**が設定されていたからだと思います。素敵な提案をありがとうございました！！